



## 制作随想

北岡文雄

版画に関するエッセイを書く宿題を待たまま、下田に来てしまった。明日から一週間ほど、南伊豆の伊浜と云う漁村に泊つて、断崖の風景を描く予定なのである。下田の宿は入江に面した旅館で、静かな波の音が間近に聞える。

今度の旅行の収穫はいづれ版画になるであらうが、現場で描いた油絵からは何故か版画にし難いものである。鉛筆で不必要な細部迄も刻明に頭に刻み込むように描いたスケッチの方が版画に出来る。

油絵の現場写生の場合は、目でとらえた印象を、筆が反射的に動いてパレットの色を混ぜ、キャンバスに運ぶ。そして全体をおおらかに表現し得ても、その中から或る一つの

形を取り出さうとすると、それは明確さを缺いて居るのである。

版画の場合、特に私の場合には、流木、小屋、漁具、草花など絵を作る上での小道具の一つ一つのはっきりした形の特徴がつかめて居ない限り、版画にならないのである。それは色彩の配分や摺り合せの順序を決定的にまで押しつめ、物の形態を或る程度迄様式化することを必要とする版画の制作過程から、必然的にそうなるので、あながち特に私の場合に限らないのではあるまいか。だから私はデッサンは出来るだけ刻明に描く。結果としては省略してしまうものでも、出来るだけこまかい部分迄描き留めて置く。沢山の材料を仕入れて置いて、それを必要の最小限度まで煮つめて、切り捨てて行くのである。だから結果として単純な形に現はれたものでも、自分自身には、そのものについて細い部分に至る迄頭に入つて居る。そう云う自信が無いとそのモチーフは版画にならない。

写真はどうかと云うことは前から考えている。現在すでに写真を制作の手段に使つて居る人も居る。然し写真はモチーフのヒントは与えることが出来ても、細部の明確さは、どんなに明瞭に写っている場合にも、不十分である場合が多い。特に頭に刻み込むと云う意味では、写真は間接的な弱さを感じる。

然し色彩に就いては、スケッチに現場で色づけしない方が良いでしょう。何故なら形は細部まで描いてもそれを切り捨て得るが、色彩は既についているその色にとらはれてしまうからである。絵にはウツの色を使つた方が、現実の感じを出し得る場合がある。

私は去年の夏に、積丹半島の入舸であの附近断崖の美しさを感じた。油絵もデッサンもしたが実は未だそれを版画することが出来ないでいる。明日から行くところは波勝海岸と云つて、伊豆半島で最も断崖の美しい雄大な風景の場所である。油絵具とスケッチブックを持って行くが、スケッチブックを充実させて来ることが出来れば、こつちの方が先に版画になるかも知れない。

さてこれでエッセイとは云えないかも知れないが、とにかく東京で出来なかつた宿題が出来た。

旅は良きものかな。



ガクブチと  
洋画材料

松山額縁店

札幌市南2条西1丁目仲通りT ④6726